

ずいそう

天地人直江兼続の故郷越後

石丸 一 茂



高校を卒業後40年近く経って思いもよらず赴任した故郷新潟でしたが、2度の冬を過ごし、関東では考えられない冬の天気に耐えられたのもやはりDNAかなと感じながら春を迎え、もうすぐ夏を感じる季節となりました。そして今年新潟での最大の話題は朱鷺の放鳥ではなく、東京オリンピック1964年以来開催の新潟ときめき国体でもなく、NHK大河ドラマ「天地人」です。恥ずかしながら主人公直江兼続の事は全く知りませんでした。当然、上杉謙信は郷土の英雄として知っていましたが、戦国時代というと織田信長、豊臣秀吉、徳川家康が思い浮かぶわけです。これは中央から眺める史観であり、それですべてわかったような気になっていたのですが、原作者の火坂雅志さんがラジオで語られたように戦国時代は実は、地方が元気だった時代なんです。京都が応仁の乱以後、将軍の権威が失墜し乱れたのに対し、都を焼け出された公卿や文化人が芸能を携えて地方に下り、戦国大名のお膝元には人々が集まり、山口の大内氏、関東の北条氏、そして、日本海側は上杉謙信の居城、春日山城を中心に経済的にも文化的にも栄えていた地方主権と言っている時代でした。今また地方分権が叫ばれていますが、日本もかつてそういう時代があったわけです。

春日山城跡は、北陸自動車道上越ICから車で15分ほどの所にあります。標高180mの春日山に残る城跡を訪ねて登山道を行くと、間もなく「御館の乱」で悲運の死を遂げた景虎屋敷や米蔵があったと言われる三の丸跡の平地が開けてきます。更に二の丸跡を通り、山頂の本丸跡へと辿り着く、裏側に下ると、当時から使われていたという大井戸が今も枯れることなく水をたたえていました。その奥に向かうと、杉林の中に景勝屋敷跡と伝える碑が佇んでいます。本丸に戻って見渡すと眼下に頸城平野、正面に尾神岳、左に米山さらには日本海を望むことが出来ました。本丸をあとに登ってきた反対の方向に下ると護摩堂、謙信公が出陣前に戦勝を祈願した毘沙門堂、そして兼続がお船と結婚し継いだ直江家屋敷跡へと続き、辺りには薄紫の花が初夏を告げるシャガが可憐に咲いていました。

直江家の居城与板城跡は、北陸自動車道中之島見附

ICから車で30分、登り口近くに市営の無料駐車場があります。新しく補修された石段があり登り易くなっていました。竹林を抜け、杉林を行くと「お船の清水」の案内板が目に入ります。春日山もそうでしたが、山城には井戸は大切なインフラだったのでしょ。104mの山頂に実城跡があり、中越平野を見渡すことが出来、千体川を内壕、信濃川を外壕にした自然の要塞であったことがうかがえます。兼続と景勝の生誕地、上田庄の坂戸城跡も訪ねました。城跡は山裾を魚野川が流れ、八海山を背にひかえた標高634mの坂戸山にあります。城主の館や家臣らの屋敷跡とされる広場、それと坂戸城跡の碑を観てこの日は時間がなくて帰りました。越後と関東を結ぶ交通、物流、軍事上の重要拠点として、その要衝を守るため立地の良い高い山に城が造られました。新潟に赴任しても大河ドラマで話題になっていなければ訪れなかったかもしれない城跡、しかし、弊社の代理店さんもこの三市町村に集中しており今も新潟県の要所である事には変わりはありません。

今世界は私利私欲に翻弄されたマネー資本主義が破綻し、未曾有の経済危機にさらされています。上杉謙信と、一番弟子である直江兼続は、戦国という厳しい乱世の中で、私利私欲だけでなく人との信義を大切に、公の心をもって事にあたることを命がけで主張した男達です。兼続の兜の前立てにある「愛」には二説あり、戦の神様愛宕明神から取った説と「愛民」の愛という言い伝えです。資料によると謙信は「将は強いだけでなく、義をもって己を厳しく律し、慈愛の心で衆人を哀れむべし」という言葉を残しており、その薫陶を受けた兼続がそれを聞いたとしても不思議はないと火坂さんは述べていらっしゃいます。関ヶ原後、上杉家が会津百万石から米沢三十万石に移封された時、兼続は「家臣は上杉家の財産」と言って家臣をリストラしませんでした。謙信が「経済」と「義」を両立させ越後を経済大国に築き上げた事を見倣い自分の後半生をかけて上杉家の建て直しを図って行きました。世界中が不安に覆われている現在、こんな素晴らしい先人が故郷新潟にいた事を知ることが出来ました。

——いしまる かずしげ 東日本コベルコ建機(株) 新潟支店 支店長——